

# OCUAC

大阪市立大学山岳会会報

NO. 43 2007. 02. 05

確かにここから見るアルパマヨ（西南稜）は、世界で一番美しいと言うに相応しい。純白の端正な三角錐が、氷河の上に泰然と峻立していた。美しさと優雅さで、マッターホーンを遥かに凌いでいる。岩の上にポイントを決めて三脚を立てた頃から、山頂に雲が湧き出し始めた。雲の合間を狙って、興奮と陶酔の中でシャッターを切り続ける。正午頃には空一面の雲に覆われたので、下山を始めた。岩場を降りて、キャンプ地まで歩いて降りる。アルパマヨを撮るという最大目標が十分に達成され、満足しきった夕食の団欒はワインが最高に美味しかった。（ペルーアンデス撮影行 小林 深より）



山岳会（OB 会）URL

<http://www.happy.net/OCUAC/index.htm>

現役 URL

<http://www.ocuac.com/pctop.html>

## 平成18年秋の山行など

山田裕敏

長治郎雪溪中央部の熊の岩上にBCを構え、念願の八峰連登をと意気込んだのもつかの間、二つのアクシデントと台風騒ぎに尻すぼみで終わった夏山。

アクシデント自体は幸い小さなもので、参加者全員に大きな教訓を残してくれ、二度と同じことは起きないだろうから、それはそれで意義のあったことと思いつちもう。

そんな事や仕事にかまけて大した成果の無かった夏も終わり、9月21日、高津の林さんの紹介で、ネパール・ヒマラヤでの高所医療と応急手当についてのジム・ダフ博士講演会に出席し、東ネパール・トレッキング出発を翌日に控えた佐々木さんと現役藤井君、近藤さんの2名と共に聴講した。映像を交え、聞きやすい英語の解説であったが、如何せん病名や薬の単語力がpoorなので細かい所が解らず、適切な和訳があって結構でした。

急激な高度獲得の人体に与える影響とその予防、凍傷対策など切実なテーマが語られ良く吸収しました。バイアグラも凍傷治療に有効との事。納得。

8月の日経朝刊「私の履歴書」は茶道遠州流家元小堀宗慶氏執筆でしたが、学徒出陣/敗戦後4年間のシベリア抑留生活を何日にも亘り記しておられた。その中で、一旦凍傷に罹り手指、足指が白色化してしまった場合は、雪で皮膚に血色が戻るまでしっかりこすり続ける事で回復する、お湯や暖気で温めれば水泡が生じ、行く行くは切断する羽目になる、彼の部隊からは凍傷による被害者が出なかった、と体験談を綴られていた。当日博士にその有効性について現代医療からの見解を質問してみたかった。

それにしてもこの講演会は日本山岳協会やJAC他多数の山岳団体が協賛したもので、遠征中の労山林氏からのメール案内しかOCUACに届かなかったのはどういう事だろうと現場に出て疑問を持った。別に山岳界活動をしたいとかするべきだとか言っているのではなく、必要な情報は我々の団体のどこかにキチット届くようなルート登録をしておく必要があると感じた次第です。

100周年だかの寄付金要請は二つも届くのですが。

AACKのover70と思われる先生方数名や若手Doctor達の出席も多く彼らの層の厚さを知らされました。

博士を囲む夕食会の方は敬遠して4人で晩飯としました。講演後のこととて、佐々木さんの高度克服経験談が多くなったのは当然ですが、皆夏山のMemberでもあり、秋からの山行も話題となりました。現役はその週末に行く予定の三伏峠から塩見までの冬山偵察は台風接近により取りやめたが天気は大丈夫そう、と言う。

それなら沢登りにでもと、藤井君の希望で前鬼川上流孔雀股谷右俣遡行から孔雀岳/釈迦岳/前鬼へ下山とし、伴さんに携帯したところこれもOKで、思いがけず翌々日からの山行が決まりました。(長い前置きにて失礼)

### 9月23日~24日 前鬼川本谷(孔雀股谷右俣) 遡行

この所大峰、大台方面の沢登りに出かけることが多く、京都から吉野への道もすっかり通いながれたが、この春からは天理/檜原間の高速道が完成し、それも国道バイパス扱いなので無料と随分便利になった。

上市口9時集合。参加者は藤井・近藤・伴・山田の4名。前鬼口から更に林道を進み黒谷との合流点付近の駐車場にて下車。10時半、直接川床に下りて沢登り装備を着ける。暫くゴーロ状の沢身を歩くと程なく滑が現れる。大きく開かれた沢で、基調は白っぽい石灰岩、所々に青い淵を持ちなかなかの景観だ。後方からかん高い声が聞こえるので振り返ると、20数名の黒いウエットスーツを着た女性たちが急ぎ足で近づいてくる。こちらはテントと食料入りの荷物を背負っているが彼女らは空身なのでたちまち追いつかれる。点在する水深のある淵に飛び込んでしまわなければならない。全員20歳台位で、ウエットスーツの上に白やピンクの半パンをはいた子などもおり、華やかな雰囲気にも包まれる。まるで北朝鮮の喜び組の様だと小生が言うといや、あちらはもっと別嬪揃いだと見てきたような事を言う人もいる。

2~3名の男性リーダーが付いている。自然派企画と名乗っていたので帰ってからネット検索すると、京都に本拠を置くアウトドア・スポーツ団体で、年間ほぼ毎週末に四季折々の行動予定を持っており、パーティ・リーダーとしてイケ面の男性10数名が経歴書付で並んでいる。参加費はそこそこしており、この様子では、若い女性客相手の結構なベンチャー・ビジネス



孔雀股谷中流部の滝

だと感じました。室内で携帯やPCマウスをいじくり視覚で時を過ごすよりは健康的な遊びです。ネット情報が遊びと商売を旨く結び付けていると言った所でしよう。

彼らとは三重滝/前鬼への山道との合流点で別れ、静寂の戻った沢をひたすら進みここだけ谷が広がっている小屋跡地にて幕営。(16時)

焚き火と山の歌は酒の切れ目で終わりとして就寝。山岳部もあんな風に新人を集めてくれないかとウ外しながらあらぬ事を考える。女の子ばかりでは話にならぬではないか。

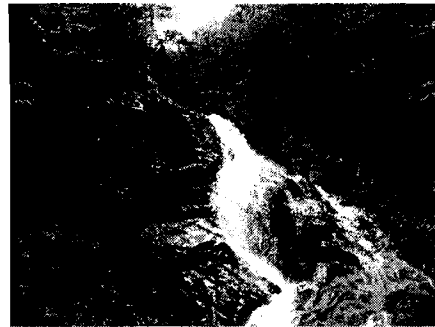
翌朝は6時では水が冷たいと7時に出発。暫くは傾斜の緩い流れが続く。見上げれば支尾根のあちこちに奇岩が聳え、朝日を受けてなかなかの光景。此处まで流れが緩かった分だけこれからの登高がきつい。左右から出てくる支谷や小滝・ルンゼ等をルート図で確認しつつ更に進む。高度が上がり見晴らしが良くなったほぼ最終局面で80mほどの斜瀑の連瀑が現れ、昼の日差しに水沫が輝き、滝登りを楽しませてくれる。

森林帯を攀じ登り奥駆道に昼過ぎに出る。ここから釈迦/大日を経て前鬼までが結構長い。前鬼への下降路の上半はステンレスと木製の階段の連続だ。前鬼から更に小一時間車道を下り駐車場に着いたときには日はとっぷり暮れていた。

#### 10月14日(土) 野洲川上流元越谷遊行

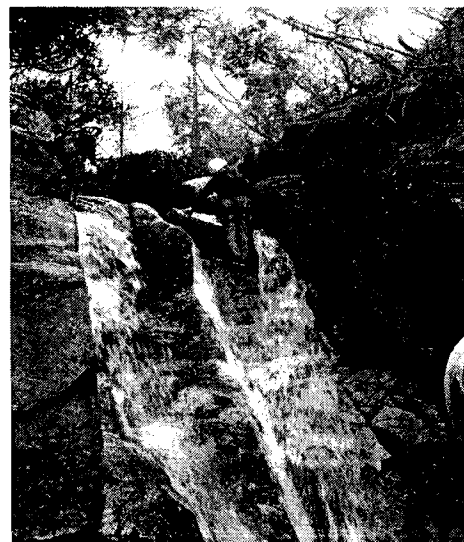
前鬼川からの帰路電車待ち方々立ち寄った上市駅前の焼き鳥屋で、寒くならないうちにもう一澤、と次の

話をしていたが、日帰りで鈴鹿の沢にてまとまった。参加者は先の4名に現役和田君を加え5人。7時半JR山科駅集合。名神栗東インターから一般道に出て、鈴鹿スカイライン手前で入谷。



元越谷取り付け部の15m滝

鈴鹿に数ある沢の中から元越谷を選んだのは、案内書の内表紙にある15mの立派な滝のカラー写真と「穏やかな流れの中に、美しいナメとそれを受ける釜の連続した饗宴があって、遡る者を酔いしれさせる魔力を秘める。規模は小さいが出色の谷。」と



中核部の滝

いう案内文に魅かれての事。

確かにその通りで、藤内壁で有名な鈴鹿山系を構成する岩石を刻んで出来た沢なので、ゴーロ状の場所が少なく、ナメと緩い斜瀑と釜が連続しており、ホールド・スタンス共に豊富な岩の傾斜面を水しぶきを浴びながら遡上するのは沢登りの醍醐味そのものです。峠の高度が千mくらいで、台高より7~8百m低いいため、沢のスケールが小さいことが難点とも言えますが、その分日帰りでコンパクトに楽しめます。

今回は余裕を持って下山し、野洲川ダムを下ったところの露天風呂に入り、山科には19時帰着。

### 11月3日～4日 空木岳/越百山

この所毎年11月初旬には伊那方面でover 60の面々のゴルフコンペが持たれている。11月2日の夜はコンペ後の懇親会で駒ヶ根山荘は賑わっていた。川勝会長宅に届いた商大時代のOB故井上好三郎氏ご寄贈の白頭山遠征録、当時の卒業アルバム、それと山荘書棚にあった戦前・戦中・戦後を記録した会誌雪線

16号から20号などを巡って、橋本さんや川勝さんたちと昔話に花を咲かせていた。雪線20号は近藤哲也さんの下、4名の女子部員が編集にあたっている。ウーマンパワーを敬すべしと。

そこへ大阪からの佐藤車が着き元気な方が現れた。昭和30年卒業の服部（堀内）恵子さん。ご同期の山本勝さんはゴルフのあと残念ながら山荘に寄らず東京へ帰られた。彼のニックネームは「蛇さん」と聞いているが、恵子さんに言わせると、「勝っちゃん」で、喧嘩相手だったとか。小柄ながらエネルギーが溢れている方で、青島幸雄の「いじわる婆さん」役はそのまま務まる方。（失礼）。10年ほど前、馬場島での永田君の25周忌だかの折、三島さんと一緒に参加された鎌倉倉の女性にお目にかかった。お話を伺うと戦前、あの銅版に刻まれている方々と（新村さんや入江さんたち）岩場を駆けておられた由。女ターザンの様な人だったんだー、と思ったことがある。彼女はもう亡くなったと聞くと、この日はそのときに似た感激を味わった。女泉さんとでも呼ばせて貰いたい方です。もう明治や大正生まれの方の再登場は望むべくもありませんが、ニューヨークの内藤毅さんなどにも、お帰りの折などにお越し頂きたいものです。

3日 最長老他に朝食をご用意頂き、空木に向かう。伴、上田、島川、山田、鈴鹿へ行った現役3名計7名。新装の避難小屋に着き、伴さん用意のキムチ鍋を現役に作って貰う。お酒も肴も豊富で十三夜の月の夜景もすばらしく、結構な夜が更けてゆきました。

4日 快晴。空木から南は始めて足を踏み入れる場所で、久しぶりに尾根歩きを楽しむ。足の速い現役と上田さん島川先生が先行。越百岳を越えた所から東側の

沢に向けて下降。道標はよく整備されているが、めったに人の入らない朽ちた木の階段が多い急坂を下る。前鬼への下りで鉄製の階段に文句をつけたが、此処に比べればあちらはずっと上等。2千数百mの稜線から下界に降りるのはやはり相当のアルバイトで、先行パーティーから一時間半ほど遅れ下山し迎えの車に収容される。

山荘では4日連続の酒宴となる。恵子さんはこの夜も健在で和歌山は真田の山荘の話聞かせてもらう。

当山荘は来年10周年を迎えるが、雨ざらしの階段は10年おきに取替えが要るものの、本体部分は新築同様で、屋根と汚水槽など水周りを整備しておけば100年は大丈夫と思われる。200年ほど経った木造家屋でこれを書いているので、素人だがこの点は大丈夫。木造家屋は手入れさえしておけば千年は持つ、お寺を見ればそれが解る。問題は借地権で当初の50年があと40年になってしまった。それが終わればどうするかは別の人に考えて貰うとして、それまでの40年間の内何年かはここに在る我々世代の子供達よりも若い今の現役に委ねることとなる。彼らがこれからどんな人生を辿るか楽しみだが、その内二世を連れて遊びに来るだろう。

再び私の履歴書から引用させて貰おう。10月の元財務官行天豊雄氏のもの。

『やってきた仕事や遊び。その中身と同時に関わった内外老若男女の多くとの交情がとても大事だった。その交情には流れ星のようなものもあれば、遠い背景のように変わらないものもある。20～30代の頃、未来は360度の広がりを持っていた。今は45度位だろう。でも出来ることのある間はそれをやろう。』

そういった交情の場の一つとして駒ヶ根山荘はあり続けるわけですが、昨年4月に塚本から杉本町に移した森本文庫なども利用頻度から見ればこちらに置いた方が値打ちが上がります。まだ敷地に余裕もあるので、図書収納と読書・談話用としてもう一棟建て増しなど、10周年記念に景気の良い話が出れば良いのですが。

以上

## Mtキナバル(4095m)登頂記

島川 勝

空模様が怪しくなってきた、雷が頭上で轟音を発すると、叩きつけるような雨が体に激しく当たる。慌てて雨具を取り出すが間に合わない。見上げるような大木と大きな開口部を持ってどんな虫でも飲み込んでしまいそうな巨大なウツボカズラ、日本の花屋さんの店頭で高価な値段がついている怪しい美しさを秘めたラン類を見ながらジャングルの中を進んで行く。同行はツアー社の13名と仕事で疲れたというので誘ったら付いてきた私の娘、現地ガイド、ポーターである。キナバル山を選んだのは、外国の山に登ってみたいとの思いがここ2、3年強くなってきたところ、先ず手始めにアジアの山からということと、4000メートル級であれば何とかいけるのではないかの思いからである。

ツアーは、9月2日、大阪発組3名と、私の娘を含めた東京発組10名がクアラルンプルを経てマレーシア、コタキナバルに着き1泊後、翌9月3日キナバル国立公園のメシラウというところまでバスで移動しそこで1泊する。9月4日、メシラウからバスで登山基地である公園本部(1524メートル)に移動する途中、キナバル山の全容が見えるところに出る。上部の岩がなんとも言えない尖った異様な形をしていてあんなところに登れるのか不安がよぎる。公園本部で荷物をポーターに一部預け(5キロの範囲)軽くして登山口(1800メートル)まで車で行き、いざ登山開始(午前9時00分)。登山路は整備されていて、約1時間歩行程度のところにシェルターがあってトイレもある。



る。第六シェルターをすぎると、ラバンラタハウス(3300メートル)に着く(午後3時30分)。この山小屋は、広くて食事もまあまあである。翌9月5日は午前2時起床し3時出発、ヘッドランプをつけて暗い道を登る。登山者のヘッドランプが点々と続いている。途中にハシゴがあったりする。サヤサヤヒュッテ(3700メートル)を過ぎるあたりから森林限界になり、岩場が続く。岩場には太いロープがあって掴んで登れるが、岩はべっとりしていて崩れることはないが、雨ですべりそうになったりする。娘はそろそろ高度と疲れでバテ気味で顔面蒼白、歩行が遅れるので励ましながらか登ってゆくと右にドンキーイヤ(ロバの耳)ピークが見え、左に尖ったサウスピークが見えるコルに出る。ここから畳を一面に敷いたような平面状の岩場を廻りこんで急な斜面を登りきると、そこがローズピーク(4095・2メートル)である。

同行者からは少し遅れたが、午前8時18分に



ローズピークに到着できたこと感謝する。下山は写真を撮りながら、ラバンラタハウスまで下りそこで1泊する。翌日は、登山ルートとは別のルートであるメシラウコースを下る。このコースは、ウツボカズラやラン類がより豊富で、熱帯の植物群を楽しみながら快適な山歩きができる。頂上から一気に降りるツアーコースもあるが、途中

中で1泊して降りるのも余裕があっていい。翌日はコタキナバル近くの島に行き、シュノーケルで熱帯魚と仲間になった。

ちなみに、旅行社はアルパインツアー、「Mtキナバルゆったり登山8日間」費用21万円、ツアーガイド付き。

## ペルーアンデス撮影行

2006年6月28日～7月15日

小林 深

世界で一番美しい山と言われているペルーのアルパマイヨ (ALPAMAYO 5947m) を、カメラに収めるために出かけました。

アンデスはアコンカグアとパタゴニアへ出掛けたことがあります、ペルーアンデスは私にとって未知の地域でした。ペルーはインカ帝国の中心地であり、スペインのピサロが僅かの軍隊で侵略し、巨大な帝国を崩壊させてしまったドラマの中心地でもあります(注)。何時かは訪れたいと思っていたましたが、まったく突然そのチャンスが訪れました。

メンバーは日本山岳写真協会と日本山岳会のメンバー4人と私の5人でした。トレックは3000m～5400mの地で、行程の大部分は乗馬によりました。ポーターやキッチンボーイもよく訓練されていて、ネパールと遜色ありませんでした。荷物はロバで運搬しました。しかし、乗馬トレックはまだ一般化していません。

訪れた山域はブランカ山群 (CORDILLERA BLANCA) ・ ・ 南北に約 150km、6000m 峰が約 40 座、5000m 峰を約 500 座も連ねる大山群であり、その山群が3000m～4000mの大平原の上に幾つかの小山群を連ねて聳えていました。その様相は、チベット高原と大変よく似ていました。最高峰であるワスカラン (6768)、チョピカルキ (6345)、ワンドイ(6395)、ブカヒルカ(6039)、チャクララフ(6112)、アルパマヨなどの秀峰が連なる山域であります。

冬の6～9月は乾季にあたるため、空気が澄んでいて大変きれいです。氷河を抱く山々はヒマラヤを纏い、水の豊富な溪谷はヨーロッパアルプスの谷に似て桃源郷のように綺麗でした。山岳地帯の人々は原住民が多く、特に女性は山高帽に原色のスカートと言った民族衣装を纏っています。放牧と農耕(ヒマラヤの段々畑とよく似ている)の世界でした。

南米へは日本と太平洋を跨いで直接結ぶ航路がないので、北米経由となります。大抵アンカレッジ上空を経由してニューヨークかヒューストンで乗り継ぎ、そこからリマやブエノスなどへ行くことになるので長い長いフライトに耐えねばなりません。飛行機代も高く、遠い国であります。

ペルーアンデスへ行かれた方は少ないと思いますの

で、その紹介を兼ねてトレックの概略を記させて頂きました。冬は乾季で、トレック中は全日快晴でした。

### 6月30日～7月2日

リマからワラスまでは7時間 400 キロのドライブであった。海岸線に沿って 200 キロ程北上するが、そこは大砂丘地帯であった。年中、雨がほとんど降らないので、海岸から幅数十キロは砂漠そのものののである。2時間ほど北上してから大陸内部に向かうと、アンデスからの水で灌漑されたサトウキビの大農場が広がっていた。やがて山岳地帯の溪谷に入ると、谷沿いには緑豊かな畠が続く。しかし、谷を一步外れると、そこは荒涼とした山岳砂漠地帯であり、草木一本生えていない。カラコルムの山岳地帯とよく似ていた。

溪谷を登りきるとコノ・コウチャ峠 (4090)、バスは一気に 4000m も駆け上がっていた。峠からは大平原が遙かかなたまで広がっており、BRANCA 山群を始め、HUAYHUASH 山群、RAURA 山群が遠望できる。何れも氷河を抱く鋭鋒の連なりであり、アンデス山地へやってきたとの実感に打たれた。大平原のかなたの白い山並みをみていると、チベット高原とそっくりであることを思い出した。

峠から一時間ほど下ったところにブランカ山群の登山基地、ワラスの町 (3090m) があった。原住民の多い町であり、リマとは雰囲気がガラリと違っていた。スペイン風に作られた町であり、直ぐ近くに氷河で覆われた山々が見えるので、ヨーロッパアルプスに似た雰囲気である。

ペルーアンデス登山の開拓期に活躍された日本人クライマー、長谷川氏に会う。ワラス在住 50 年、ガイドとして多くの日本登山隊の面倒を見てこられた方であった。

ワラスはブランカ山群の中心地であり、ここで2日間の高度順化を兼ねてブランカ山群の撮影を行う。ワスカラン (6768)、ウンダイ(6395)、チャクララフ (6112) ・ ・ 等々を撮る。

### 7月3日～6日 アルパマイヨ・ベースキャンプまで

初日のキャンプ地まではマイクロバス。途中ボルト・チェロ峠 (4767) で朝景を狙う。峠の朝はかなり冷え込んで、バスの中で羽毛服を着込む。ここは太平洋側からアマゾン側への分水嶺である。カメラをセットして待つて居たら、突然ガスが切れ始めワスカラン南峰が赤く染まり始めた。

峠を越えて暫く降りたところで、美しい湖水がありワスカランが眼前に聳えていた。ここでも暫く撮影、絵葉書写真にうってつけの綺麗な風景であった。峠からの溪谷は大変美しく、アルプスの谷の優雅さと、ヒマラヤの谷の雄大さを合わせたような溪谷であった。ここまさに桃源郷の名に値するようなところであり、途中の小さな部落は家屋も立派で綺麗であった。

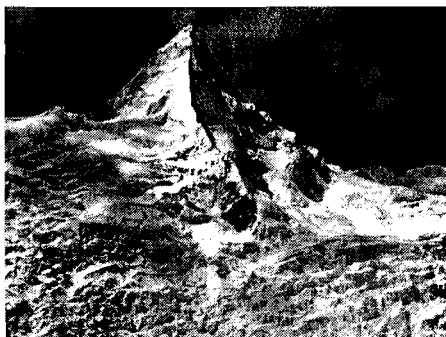
最初の村、ヤナマ(3400m)は村祭りの最中であった。村の広場で楽隊が演奏していたりで、民族衣装で着飾った村民が一杯で通れない。引き返し村を迂回して、狭い道をやっと通り抜けた。この辺りまで来ると、インカの末裔たちである山岳民族の世界である。女達はみな山高帽に原色のスカートを纏っている。村を過ぎてかなり走った頃、左手車窓にまさに天空を突き刺すような鋭鋒が光っていた。チャクラフ東峰であった。

最後の村、ボマバンバ(2950m)でトレックの食料を調達する。ボマバンバを出て一時間ほど山に入るところが、最初のキャンプ地であった。高度は3400m、残念ながらアンデスの高峰は見えなかった。

やがて、明日からわれわれを運んでくれる馬とロバ隊が到着した。馬は馬とロバの中間程度の大きさであった。ラバか尋ねたが、馬だという。鎧やクラも日本のとかなり違う。口は荒縄で縛り付けただけである。

私は乗馬教室で競馬を引退した大きなサラブレッドに乗っていたので、これがほんとに馬かと思ってしまった。馬にもいろんな種類があるのだろうが、こんな小さい馬で大丈夫かと一寸心配になった。ここから先はまともな道がないので、明日から乗馬トレックである。

二日目、トレック中の風景は、チベットの大高原とそっくりであった。広いならかな草原地帯と、それを取り巻く高度差 5~600 メートル位の山々が何時までも続いた。山には木がまったく生えていないが、山裾はサボテン状の草に覆われていて緑色である。草原には放牧に來ている群れがあちこちに点在していた。空



気は冷たく、風が吹くとかなり寒い。まさにチベット高原を馬で行く気分

であった。

幾つも峠を越えてどんどん高度を上げ、この日の最後の峠(4340m)を越えて再び太平洋側に入った。峠からはキラキラ輝くアルパマヨ山群が遠望できた。峠の下りは急坂で、馬を下りて歩いて降りる。小さな湖水のほとりが今夜のテント地ウエクロ・コーチャ(4100m)であった。プカヒルカ(6074m)が近くに見える。昭和36年、一ツ橋隊が初登頂した山である。

3日目、周りの山の高さがどんどん高くなるが、広い谷筋は相変わらず草原が続く。次々と5000mに近い峠を越えて進むが急坂が多くて、馬も乗ってる私も大変であった。時々強風に煽られて、馬もろ共横流しにされてしまうこと再三であった。急斜面のトラバース道は、一歩間違ったら遙か数百メートルの谷底へ転落必至である。馬を信頼して、しがみつく様に乗っているしかなかった。

しかし、馬は登山のベテランであった。危険な箇所は、足の置き場をよく考えてからでないと決して先を進まない。大きな岩を越える時は飛び上がるので、落ちないように必至でバランスを取らねばならない。その度に膝を屈伸させてバランスを取らねばならないので、膝はキリキリするほど痛かった。

しかし、そうした危険地帯以外では、遙かなる高峰に囲まれた雄大な風景を眺めながらの素晴らしい乗馬行であった。美しいアンデスの高峰を見ながら、大自然の真只中を終日乗馬で旅するとは人生最高の幸せであると感じた。

キャンプ地は4200m、夕食はキッチンボーイがペルー料理を作ってくれて、大変美味しかった。赤ワインを美味しく飲んで、程よく酔って寝袋に潜り込んだ。ワインはロバ隊が沢山運んできたので、高山病を気にしながらも毎晩欲しいだけ頂けた。

昨夜5回も小便に起きたのは、高山病の予防に良いと云うのでコカ茶を沢山飲んだからであった。コカ茶は麻薬の原料であるコカの葉で作ったお茶であり、日本では麻薬に分類されていて輸入は禁止されているそうだ。利尿剤として、素晴らしい効き目があるようだ。

4日目も急坂の連続、道はどんどん険しくなり、両脇の山は急峻になり氷河で覆われるようになってきた。馬は高度と急坂とで、時々止まってフーフーと激しい息使いをする。そして恨めしそうに大きな目でジーンと私を見つめるので、可哀相になってしまう。それでも4500mもの高地で、500mもの急坂を一気に登って



くれる。小柄であるが、すごい馬力の馬であった。

最後の峠、カラカラ峠(4830m)に上がると、純白に輝くアルパマヨが目の前に聳えていた。サンタクルス山群の山々も直ぐ向こうである。思わず歓声上がる。岩の急坂を降りたら、広い川原の草地であった。4700m、アルパマヨのベースキャンプ地であった。アルパマヨ谷から上がってきたトレッカーが2組、キャンプしていた。

#### 7月7日～9日 アルパマヨ撮影

快晴であるが、太陽はアルパマヨの裏側なので山は焼けなかった。しかし、8時頃より朝の斜光が入り始め、素晴らしい状態になってきた。時間がゆっくりあったので、一時間ほど、撮影を続けた。

今日はモレーン上部のキャンプ地へ上がる。モレーンの登りは急なガラ場で、馬は苦しそうであった。乗ってる私も、直ぐに膝が痛くなってしまった。丁度、穂高のザイテングラードを馬に乗って登っているような登りである。モレーン中程に深い緑色の大きな氷河湖・アルパマヨ湖の良く見えるところで暫く撮影する。峠に着くと、アブスラク(5555m)とサンタクルス(5829m)の雄大な姿が飛び込んできた。

峠を越えてキャンプ地に到着、高度4700mであった。カメラザックを担いで辺りを歩き回るのが高度順化は完全に出来上がっているらしく、急坂を登らない限り3000m位にしか感じなかった。

この辺りの地形は、全部氷河の削ったカール地形である。乾燥しているが、砂漠様の荒い草が生えていて全面が緑である。だから、こんな奥地にも放牧の痕跡がある。草さえ生えていれば、どんな奥地へでも出かけるようだ。太陽が山陰に沈むと、急激に冷えてきた。

夕景の撮影は日が高いうちはサンタクルスの見える丘へ出かけ、日が落ち始めた時はテントの近くでアルパマヨ西壁を狙った。

トレック中、馬もロバもテント地に着くと放されてしまう。エサは一切与えない。テント地の近くで勝手に草を食っている。放り出しておいても、逃げないのが不思議であった。中にはかなり遠くまで行ってしまいうのも居るが、朝、ポーター達が行くと逃げもしないで素直に帰って来る。エサも燃料も要らない最高に便利な交通機関なのである。

翌日は撮影のため、更に上部まで登る。モレーンの上部まで馬で行くが、昨日以上に急なガラ場の急坂で、馬にも人にも厳しい登りであった。時々蹄鉄が岩で滑ったりするので、馬から落ちそうになる。よくまあ登

ってくれたと、感心した。

ガラ場を登りきったところで馬を下りた。ここから先は岩場で、馬は登れない。5000mを越えているが、カメラザックはポーターが担いでくれたので、サブザックだけの私は快調に登ることができた。途中2ピッチ、ザイルで確保してもらう。岩場を登り切ったら歓声が上がった。眼前にアルパマヨが輝いていたのである。高度5400mであった。

確かにここから見るアルパマヨ(西南稜)は、世界で一番美しいと言うに相応しい。純白の端正な三角錐が、氷河の上に泰然と峻立していた。美しさと優雅さで、マッターホーンを遥かに凌いでいる。岩の上にポイントを決めて三脚を立てた頃から、山頂に雲が湧き出し始めた。雲の合間を狙って、興奮と陶醉の中でシャッターを切り続ける。

正午頃には空一面の雲に覆われたので、下山を始めた。岩場を降りて、キャンプ地まで歩いて降りる。アルパマヨを撮るという最大目標が十分に達成され、満足きった夕食の団欒はワインが最高に美味しかった。

翌日、アルパマヨベースキャンプに降りて、午後は休養となった。夕食時、日本山岳写真協会のKさんが、80歳まで山岳写真山を撮り続けたいと言われた。多くの会員が70歳までに止めてしまうとのことで、どの会でも似たような状況らしい。私の所属する山岳写真の会でも、70歳を超えて高山に登る人はほとんど居ない。

私は丁度70歳、今後も体力が許す限り続けたいと思ったものの、せいぜいあと数年だろうと思ってしまった。・・・・・・

このあとトレックはSantaCruz(6259m)山域を経て7月12日まで続きますが、ここまででペルー・アンデスの様子が大体分かって頂けたと思いますので、紙面の都合もあり以下は省略します。

バタゴニア、アルゼンチン、チリなどと、ペルーとは同じアンデス山地と思えないほど違いが大きいことを知りました。まだ訪れたことのない中米諸国の山域は、また全然違う世界だろうと思います。日本のスケールで考えたらアカン世界でした。

ポジフィルム(35ミリで36枚撮り)40本ほども撮ってきましたが、気に入った写真は10数枚でした。

(注) 参考図書：増田義郎著「インカ帝国探検記」(ある文明の滅亡の歴史) 中公文庫・ピサロによるインカ帝国の征服が、詳細に記されています。



## モンブラン (4807m) 登頂

40卒 上田 忠士

今年7月佐々木君達とフランス、スイスに出かけたが、その目的の第一はモンブラン登頂であった。シャモニー滞在中案内所で好天続きを確認して7月18日一番のバスでレシューズに向かった。ロープウエーと登山電車で終点の登山口ニ・デーグル駅到着9:00.

ここは標高2360m。電車から降りてきた多数の登山者と歩き始めた。開けた斜面、明るい谷を登るが樹木は全くない。落石の多い谷を急いでトラバース、雪渓を渡るとテート・ルース小屋があり昼食休憩。ここから見上げる急な岩稜を苦勞して登り切ると今夜の宿泊所「グーテ小屋」であった。標高3820m、1500mの登りであった。小屋は数年前に拡張工事がなされて別棟が完成されており、そこに入り休憩する。佐々木君は10年ぐらい前にここまでは来たことがある。次々と小屋に登山者が入ってくる。夕食は18:00.

きわめて簡単な食事である。日本人はわれわれ二人と日本人ガイドに案内された日本人登山者一人のみだ。食堂に総勢50人ぐらいいただろうか、がやがやと騒がしい。明日に備えて7:30就寝。

7月19日、起床1:20、朝食2:00。配膳されるものと思いテーブルに座って待っていたが来ない。セルフサービスになっているのだ。やや遅れた。他パーテ

イのガイドが登山客の装備をチェックしている。なんとなくあわただしい雰囲気だ。準備の出来たパーティーから次々に出発して行く。2~3人パーティーが多いようだ。われわれも2:45ヘッドライトを付け、やや緊張した面持ちでザイルを結び合って出発した。雪は硬くアイゼンが心地よく効く。気温は氷点下になっているだろう。先行パーティーのヘッドライトの灯りが揺れている。上空は満天の星で好天が約束されているようで元気が出る。雪の中ではあるが、トレースは完全についておりただひたすらそれを辿る。見えるのは足元2~3m先だけだ。

われわれ64歳と65歳の者にとっては最後の登頂チャンスになるだろうと思うと登攀意欲が高揚し、休みもなく速いピッチで進む。なだらかな雪稜、広い雪面が続くが、このあたりは特に危険なところはなさそうである。

東の空がやや明るくなって来たころ尾根を乗り越える大雪原に立つ。ここからはるか先に

モンブランへの雪稜が大きく見える。アップ、ダウンがかなりありそうである。

約100m雪面を下り、下り切ったところでヘッドライトをザックに納める。ここからが本格的な登りの開始である。左上方に大きなヴァロ避難小屋が見える。30分ぐらいの登りで小屋への広い雪稜の分岐に到達。このころ真っ赤な太陽が遠く、雲海から輝き始めた。感動的な情景だ。ここから左側が大きく切れた急な雪面、アイゼンをきしませ、ピッケルで安定を保ちなが

ら登る。このあたりがルート案内書の写真に出るところであろう。登ったり下ったりを繰り返す。登り切ったところから左右に切れ落ちて高度感のあるナイフリッジが200m~300m続き、慎重に進む。ナイフリッジを通過50mぐらい緩やかな雪稜を登りきると頂上であった6:45。そこは名前の通り白い雪に覆われ広く20人ぐらい居れそうである。グーテ小屋から4時間、ノンストップの行動であった。

先行したパーティーが歓喜の声をあげている。



ここはヨーロッパの最高地点、360度何も遮るものはない。モンテローザ、マッターホルンなどが遠望され、眼下にはシャモニー

の町が見渡せる。しばらく登頂の歓びを分かち合う。雄大な山並みを眼底に焼付け、写真に収め、もう再びこの地を踏むことはないだろうと後髪を引かれる思いで7:10下山にかかった。ナイフリッジは登って来るパーティとすれ違うたびに注意して体を避ける。急な斜面を下り終わるとあとは好天の中をルンルン気分を下る。あれだけいたパーティはどこへ行ったのか、この大雪原を今歩いているのはわれわれ二人だけである。気温が上昇し雪が緩みアイゼンに雪が付着する。グーテ小屋着9:20。早い方の下山であった。

予定通り念願のモンブランにガイドなしで登頂できたのは、風もほとんどなく好天に恵まれたからであろうが、良きパートナーの存在があったからこそと感謝の気持ちで一杯である。グーテ小屋でアイゼン、ハーネスを外し、少し休憩して高度差600mぐらいの急な岩稜を慎重に下った。ここは悪天候や雪があれば苦勞するであろう。あとは達成の満足感を味わいながらだらだらと長い、長い道を歩くだけであった。電車乗り場ニ・デーグル駅到着13:45。

頂上からの高度差2500m、距離25km。休憩を含み11時間の行動であった。

シャモニーに帰り、岡本先輩、家内らとワインで祝福の乾杯。

モンブラン登頂後、サースフェーのアラリンホルン(4027m)にも登り、それぞれ帰国の途についた。

登頂者：佐々木惣四郎

上田 忠士

登山日：2006年 7月18, 19日

## 長い長いカンチェンジュンガ

### BCへの道

2006. 9/23-10/20の記録

40年卒 佐々木惣四郎

ネパールの最も東に位置し、インドのシッキムと接するカンチェは、世界3位の高峰で8598Mあります。「遠きカンチェかマナスルか」と歌にもなり和田城志(工50卒)さんの登頂した山でもあります。しかし、このカンチェは入山制限地域で山深く、訪れる人は年間100-200人で小生入山の19日間に12パーティ(イタリア、スペイン、イギリス、南ア、アラスカ、西独 等々日本なしの約40人)に出会っただけでした。1人ではトレックは認められず登山と抱き合わせでOKとなり、ボクト峰(6143M)が目標となりました。一抹の不安がありましたが世に名高いジャヌー峰(7710M)をじかに目のあたりにしたいとの思いで4年来のシェルパと6人のコック、キッチン、ポーターと旅が始まりました。

カトマンズからビラトナガルまで飛行機で行き、ここからジープで2Hでビルタモールという所へ着くも、町は停電中でホテル探しに30分かかり、pm8時やっとホテルに入る。翌日am4時半の便にて、麓のタブレジュン行きで行こうとしたが満席で8時半便にて出発し、pm7時ゴベタというところに、転覆する程の悪路の中5-10Kのノロノロ速度で着き、ほぼ全員50ルピー(80円)で宿泊した。翌6時またもや大揺れでバスが発出し、12時にやっとタブレジュンに着く。17時間の長旅で、とても定期バスとは思われない。信じられない。カラコルムハイウェイでイスラマラードから17時間かけてギルギッドまで行ったのより悪く、3日かけてようやくタブレジュンに着いたことになる。「あーカンチェは遠いなー」というのが実感であった。

9月28日キャラバン開始。ミトング(920m)ーチルワ(1270m)ーセカトム(1660m)ーアジムロッサ(2510m)ーキャブラ(2730m)ーグンサ(3500M)と続き、暑さに閉口してコーラを飲むのが楽しみ。ひたすら河を遡り、山には巡り合えず、豪快な滝が3箇所のみ。ここからやっと山が見え始め翌日カンパチェン(4100m)手前では念願のジャヌー(7710m)が見え大感激。アマダブラム、マチャプチャレと並び人を寄せ付けない勇壮な姿で見飽きない。圧倒的と言える。丁度3700Mの高度差で、目の前に

岩壁がそそり立っている訳である。

カンパチェンより山が見え始め、ロナック（4760m）ーパンペマ（カンチェンジュンガBC 5000M）に10月7日に着き、高度順化の休みを取る。目の前にカンチェの北面が3500Mそそり立っており、和田さんのトレースに限りない誇りを感じさせられた。またウエッジピーク 6750Mのヒマラヤひだが素晴らしい。何回も買ったてのキャノンEOS5で写真を撮ってしまう。

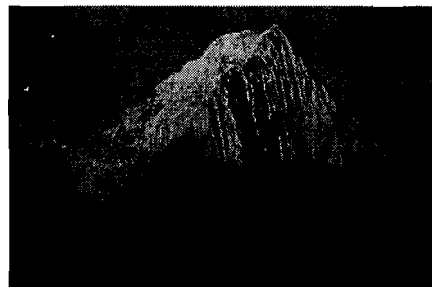
10月9日  
の出発後12  
日目、裏手  
にあるドーモ  
リ 6050  
MにAM1時  
に起き、1時  
45分約マイ  
ナス5度の中  
シェルパと出  
発。天気は出  
発以来、最高  
と思われ、空



に月がコウコウと カンチェンジュンガBC 5000M  
輝き、オリオン座が頭上にあり、まわりの山々は白く幻想的な装いである。テント地から5400m程はモレーンの連続で息が切れる。5400mから雪と岩のミックスで、am5時35分向かいのカンチェンジュンガ、ウエッジピークが赤く染まり、最高のご来光であった。ここから雪のリッジとなりアイゼン着用し、最後は30m程の岩峰で、3級程度の岩登りながら1時間もかかり、7時20分頂上に立つ。高度は、6050mとスペイン登山隊が言っていた。まわりの素晴らしさは過去4回の6000m級の登山の中でも最高で、エバレストのカラバタールとも匹敵する素晴らしさである。ジャヌー、カンチェ、ヤルンカン、ツインズ、ウエッジピーク 等々山がひしめき合い天上の展望台で、写真とりながら30分も滞在した。

結局、休みを含め、登りにかかったのは6時間で、BCまでの下山は3時間で、10時30分BCに着いた。テント場からは、すぐそこにピークが見え、3時間ぐらいでゆけそうなのに、今回もゼイゼイいいながら、登った事になる。

地図からも解るように、この地域には山が密集しており、スペイン隊が登山中のドーム コング（7440m）峰も近くにみえたが、今回敗退の様子。今回の挑戦は2回目、再度3回目はチベット側から挑戦するとの事でリルンと似ている。



パンペ  
マからの  
帰途、ボ  
クト峰に  
登るべく  
登山許可  
を得てい  
たが、日

ウエッジピーク 6700M の朝日  
(5800Mより)

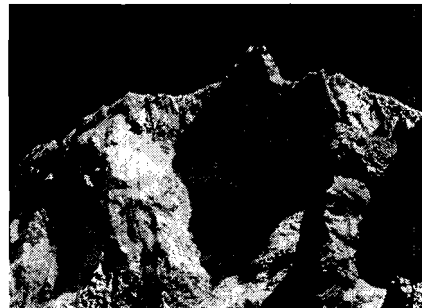
本での事情  
で早く帰る必

要があり、断念して、同じ道を7日間かけてタブレジュンに戻った。最低高度920Mで最高高度5000Mの約4000M登行である

が、グンサ川の遡行での高巻きが多く、6000M近くは登行必要となる。パッティ（小屋）は貧しく、宿泊、食事は自前にてやる必要があり、他のトレックパーティーは凄い人数のポーターを連れていた。

キャラバンでのコック給料 500ルピー（800円）でポーター 350ルピー（560円）で食事込みながら日本での昔のニコヨン並みになりつつあり 小生の払いは\$3000（一日当たり80ドル）であった。マオイストには集金にこれ5000ルピー（8000円）とられた。

最も  
苦労した  
事の1つ  
は長い夜  
の眠りに  
あった。  
7時には  
夕食が終  
わったあと、



ジャヌー7700M 4500Mより

カセットで1時間余音楽を聞いてから眠るのですが、慣れれば以外と長時間寝れるようでしたが長い長い夜でありました。また、昼の時間も多くあり、持参の文庫本7冊を読みきり、良い思い出となりました。

タブレジュンからの帰りは飛行機に固執したが不定期のようで2日間待つようやく乗れ、ピラトナガールまでゆき、乗り換えてカトマンズまで\$160で、乗り換えの混雑は激しくとても1人では行けない。

カトマンズに着いてヤレヤレであったが バンコックへの飛行機が満席続きでキャンセル待ちのスタンドバイでようやく日本にたどり着いた。バンコック空港は、新空港に移行しており、これまでと比較し、味気なさを感じさせられた。

## 巨星墜つ

藤本 勇

平成 18 年 11 月 20 日 大橋秀一郎さんが 88 歳で天寿を全うされました。

西宮市の山手会館で通夜と告別式が執り行われ、祭壇にはたくさんの菊の花に囲まれた大橋さんの慰霊のお写真が飾られていました。故人は生前われわれの山岳会の遠征にはランタン・リルンをはじめカンジロバ・ヒマール、四光峰と格別のご支援を賜りました。

故人との思い出は、皆様それぞれにお持ちのことと思いますが、私にとっての最大の思い出は四光峰の遠征隊の資金集めでした。当時、故人は遠征隊の実行委員会の会長をされており、在阪の銀行の四行で 2400 万円は集まると申されていましたが、結果は 1200 万円しか募金を集めることが出来ませんでした。その責任をとられたかどうか知りませんが、故人はポンと 1000 万円の大金を遠征隊にご寄付をされました。当時、最高顧問であった泉さんは『さすが大橋やなあ。社長をおりても大したもんや』と申されていたことが鮮烈に思い出されます。そのお蔭で無事に遠征隊を送り出すことが出来ました。

また毎年、春の桜の満開のころには、ご自宅の庭で花見の宴を開いていただき山岳会の若手に美味しい松坂肉のスキヤキをたらふく食べさせていただきました。夏には六甲山にある日本で最古のゴルフ場でゴルフコンペを何度か開いてくださり、ご自分は最後までプレイされることはなかったと記憶していますが、若手が楽しくゴルフをしている様子をみるのを楽しみにしておられました。

故人はここ数年、公の場には姿を見せられませんでした。告別式の会場のお写真は今年の 8 月に米寿の祝いのときのお姿だったとお聞きしましたが、往年のダンディな故人のお姿が偲ばれました。お酒をこよなく愛して、亡くなる前日まで好きなワインをお飲みになり、最後はご家族に見守られながら、まるで木の葉が風もないのに落ちていったように静かに旅立たれたそうです。

通夜、告別式には大勢の参列者が見え、市大山岳会関係でも普段、総会には顔を見せられない方々も来られていました。これも故人の人徳だと思います。リルンの森本夫人、馬野氏、中村氏、卒業以来はじめての小林（旧姓服部）てるさん、常慶氏、尾形夫妻など。市大以外では関西登高会の浅野夫妻、JAC の阿部さん、宗実さん、日本ネパール協会の薬師さん、大阪山の会の吉永さんなども来られていました。

これからはきっと極楽の山々を先に逝かれた“大阪商大山岳部”の方々とご一緒に登られることでしょう。

いまはただ故人のご冥福をお祈りするばかりです。

合掌

## 大倉豊彦さんを偲んで

経 3 0 卒 高木 健次

大商大・市大の先輩達が、京都版の新生歓迎会を開いて下さり、その席で初対面。だが親しくなったのは、山岳部に入ってから。

記憶を辿ると、前半の涸沢合宿が終わり、後半の縦走となりE班が編成された。針の木谷・針の木峠から平の渡（丸木の橋）を経て、五色ヶ原・鷲岳から立山のコース。平小屋での岩魚の塩焼きの美味しいこと、五色ヶ原のなだらかな美しさ 等々大倉さんと共に満喫した。後日、Eパーティは良い思い出だと言っておられた。

この隊には、青木さんも一緒に、何時もニコニコで、余り細かな作業はせず、ドーンと構えておられた。まさに対照的に、大倉さんはこまめに動いて準備される。テントを張る折には、この様な光景が印象的だった。

後に、芦屋のロックガーデンで練習中に、大倉さんが落ちて、入院された事件が発生。時の会長大橋さんが、親身になって経済的側面の支援をなさったのには感服した。

S 2 9 年に田熊汽缶へ入社された。大阪本社勤務の時代は、営業・総務畑の管理職で活躍されたが、「より忙しくなったのは関係会社サンプラントやタマテクノスのトップに就任された東京勤務時代。少なく共、15－16年間横浜市在住だったが、業務多忙の中でもゴルフはやっていた。山歩きまでは、時間的にも難しかったようだ。」（奥様談）との由。元々人間関係、従って交際を大切にされる方らしく、有恒会東京支部には顔を出しておられたと伝聞した。

平成8年に役員定年で宝塚に戻られた。企業とはフリーな立場になって、母校の経友会（OBによる経済学部現役への応援団）の立ち上げに努力された。

初冬に入った。鍋が恋しくなる季節だ。古い言葉だが、鍋の材料や炊き方に一家言を持ち、煮炊きをリードする人を「鍋奉行」という。この伝によれば、大倉さんは「段取奉行」、「総務奉行」、或いは「懇切奉行」と言えそうだ。（ゴメン！）彼岸には11年先に青木さんが居住、あなたより5ヶ月半後に、大橋さんが彼岸へゆかれた。そこで大阪市大山岳部ダベリングパーティをお楽しみ下さいませ。

私は此岸より、冥土におけるご幸福を心からお祈りしています。

合掌

## ヒュッテ雪線「秋のイベント」と外階段改善のご報告

久保田 淳三

ヒュッテ雪線も今年で9周年を迎えました。建物本体は損傷も殆どありません。利用される方も愛着をもって接していただいていますので、特に室内は当初とほぼ変わらず、きれいそのものです。数度の外壁塗装等、皆様のご協力に感謝申し上げます。ただ、利用者の中には、退去時に清掃等お忘れの方も見受けられますのでご留意のほどお願いいたします。

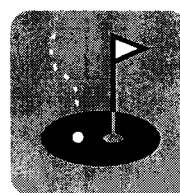
外階段は、9年間の風雪を経験し、痛みがひどく危険な状態になりましたので今回改装いたしました。(後記)

イベントにつきましては、山行組(11/3-5, 空木岳、越百岳縦走)の報告を除き、会長杯を中心にご報告いたします。

### 1. 「2006秋のイベント」

#### ・ 第9回会長杯(ゴルフ)

当日は好天に恵まれ、紅葉には少し早いようでしたが、川勝会長を始め終日1年振りのプレーを楽しみました。



実施日 11月2日(木)

コース 信州伊那国際カントリークラブ 白樺コース(キャディ付)

参加者 (敬称略)

川勝弘一、山本勝、橋本信行、小笹孝、中島信正、藤木富久、丸子隆志、山田裕敏、広瀬秀雄、大堀暁義、久保田淳三 以上11名

成績 優勝 丸子 準優勝 小笹 BB賞 橋本

山本さんを除いて11名(苑樹慶子さん参加)は前日夕方までに到着、前夜祭はにぎやかに盃をかたむけ、2日夕の表彰懇親会も大いに盛り上がりしました。

来年は10周年を迎えます。オープンコンペ(会長杯)を予定していますので多数の方の参加をお待ちしています。

#### ・ 開催日 2007. 11月2日(金)

#### ・ コース 信州伊那カントリークラブ 唐松コース(キャディ付)

詳しくは改めてご案内します。

### 2. 外階段の改装工事

当初、長持ちさせるには鉄骨製が良いのではとのご意見もでしたがログハウスには少々似つかわしくないし、又10年も持てば良いのではとの結論に達し、木製に決めました。工期は10月10日-11日の2日間、横地建築(名古屋)により、全面取替えを完了しました。

従来とほぼ同仕様ですが十分な補強を施しました。11月3日には再度上塗りを実施(大堀、中島さん)しましたので、来荘の皆さん、出来栄を見てやって下さい。これからはメンテにも気をつかい10年以上の耐用を期したいと思います。

- ・ セキュリティカメラとソーラータイプのライトセンサーも取り付け完了しています。
- ・ 地下室のキーは古くなりましたので新しいキーに取り替えしました。ナンバーが変更されましたのでご利用の方はご一報(メール)下さい。個別にお知らせします。

以上

## 編集後記

ハレー彗星でおなじみの天文学者ハレーは、生命保険を科学的に始めた人物として有名でもある。

ヨーロッパでは、年末に1年の死亡者が公表され、それをもとにして料率などを決めたそう。

そういうことが保険会社の宣伝に書いてあった。そして保険にもいろいろあるものだと感心した。

食堂が食中毒を出したときの営業保障はまああるだろうと思っていたら、「天候デリバティブ」というものがあるのを知った。行楽シーズンの天候不順によるもうけの減少をカバーするものだ。商品名も「晴れたらいいな」というのがあり、中には今年のような暖冬に備える「冬のソナエ」という笑ってしまうような名前もあった。

登山には傷害保険がおなじみであるが、知人の話を聞いて考えさせられたことがあった。

旅行者が募集した百名山登山ツアー。知らぬ同士が薬師岳を目指したそう。途中、雷に打たれるなどで負傷者が出て散々なツアーになり、旅行者の添乗員は敗退を決意した。

しかし、中には「契約違反だ」と登山を継続する参加者がいたとか。

こんなご時勢では、そのうち「登頂デリバティブ」もできかねないなと思った。

もっとも、登山を商売にしようこと自体が問題なのかもしれないが。

(八)